

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)を識る

企画・編集 宇都宮大輔 横浜市立大学大学院医学研究科 放射線診断学

序説

2019年12月、中国・武漢から発生した新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)による新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のニュースが流れた。そのときには、数年に一度は世界のどこかで新規感染症が発生するものと同様であろうと思っていた。そして、これまで同様にパンデミックにまでは至らずに抑え込めることを特に根拠もなく期待していた。

しかし、2020年に入り、その期待は大きくはずれ、COVID-19は中国に留まらず、全世界にまたたく間に広がっていった。なかでも日本は「ダイヤモンド・プリンセス」号への対応で、かなり早い時期からこのCOVID-19への対応を迫られることになった。これまで経験のない事態であり、「医療崩壊」という言葉が現実のものとなってくる恐怖を、多くの医療者が経験している現状といえる。われわれはそのなかを手探りで「正解」を求めて彷徨っているわけであるが、病院はこのようなパンデミックを想定した構造になっていない部分が多く、「正解」がみえてきてもそれに近付くことができない場面にしばしば遭遇する。例えば「正解」の感染対策がみえても、そのための物資が不足していれば、それは「絵にかいた餅」でしかない。

具体的にどのようにして「各施設ごとの正解」を目指し、それに近づく努力をしているのかという「生の声」をお伝えすることを本特集の主眼とし、以下のよう構成した。

I COVID-19の一般的事項

II COVID-19の画像所見

III COVID-19に対する放射線部の対応策

各執筆者のリアルな経験が生かされた原稿である。

本書を手にとっている読者の施設において真に役立つ情報が盛り込まれており、各施設におけるCOVID-19対策の「正解」に近づくための一助としていただきたい。

宇都宮大輔